

【令和4年度足立区総合教育会議】会議概要

会 議 名	令和4年度足立区総合教育会議		
事 務 局	政策経営部政策経営課		
開 催 年 月 日	令和4年10月27日(木)		
開 催 時 間	午後1時14分～午後2時31分		
開 催 場 所	足立区役所南館8階 庁議室		
出 席 者	区長 近藤 弥生	教育長 大山 日出夫	教育委員(教育長職務代理者) 近藤 俊明
	教育委員 小関 朝之	教育委員 早川 貴美子	教育委員 倉橋 さとみ
	東京都立足立工業高等学校校長 鴻野 誠	東京都立青井高等学校校長 加藤 泰弘	政策経営部長 勝田 実
	あだち未来支援室長 楠山 慶之	教育指導部長 荒井 広幸	学校運営部長 森 太一
	子ども家庭部長 上遠野 葉子	こども支援センターげんき所長 橋本 太郎	政策経営課長 伊東 貴志
	子どもの貧困対策・ 若年者支援課長 祖傳 和美	教育政策課長 田巻 正義	
会 議 次 第	別紙のとおり		
資 料	<ul style="list-style-type: none"> ・次第 ・出席者名簿 ・座席表 		
そ の 他			

(審議経過)

○伊東政策経営課長

定刻より少し前ではございますが、皆様おそろいでございますので、ただいまより令和4年度足立区総合教育会議を開催させていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、政策経営課長の伊東でございます。よろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、何点かご案内させていただきます。本会議は、公開を原則としております。そのため本日は傍聴の方が2名いらっしゃっております。また、会議記録はホームページで公開をさせていただきますので、本会議中の皆様の発言につきましては、録音をさせていただきます。発言の際は、お手数ではございますが、お手元のマイクのボタンを押していただき、終わりましたら再度マイクのボタンを押していただければとお願いいたします。

また、公開用の写真撮影が入りますこともご了承いただければと思います。よろしくお願いいたします。

まず、本日ご出席の教育委員の皆様をご紹介します。

まず近藤俊明様でございます。

○近藤教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

小関朝之様でございます。

○小関教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

早川貴美子様でございます。

○早川教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

倉橋さとみ様でございます。

○倉橋教育委員

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

また、学校現場の声をお聞かせいただくために区内の都立高校の校長先生、お二人の方にもご出席をいただいております。

ご紹介いたします。

都立足立工業高等学校校長、鴻野誠様です。

○鴻野足立工業高等学校校長

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

都立青井高等学校校長、加藤泰弘様でございます。

○加藤青井高等学校校長

よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

よろしくお願いいたします。

なお、本日、区長及び教育委員会の求めに応じて、関係する職員も同席をさせていただきますので、出席者につきましては、出席名簿でご確認くださいようお願い申し上げます。

それでは、近藤区長からご挨拶をお願いいたします。

○近藤区長

お忙しい中、ご出席いただきありがとうございます。

本日の会議のテーマは、「若年者支援」とさせていただきます。

「若年者」というと、かなり幅広い年代を指すようですが、今回は高校卒業から大学ぐらいまでの若い方ということで進めていきたいと思いません。

そもそも足立区は貧困対策に力を入れているわけですが、中学までは区立、そして高校になると都立もしくは私立ということで、中学から送り出した後、どのような生活をされていて、どのような困難があるかということが見えづらいということが1つございました。

そしてもう1つは、高校へ進学はしたものの、中退者の数が都内で一番多いという時期もあり、これに危機感を持って都立の高校の先生方との連絡会を立ち上げました。進学した足立の子どもたちの実態について伺っていくうちに、かなりの深刻な状況が浮かび上がってきたということで、若年者支援に力を入れていくことに舵を切ったわけでございます。

今日はお二人の校長先生から詳しくお話を承りたいと思っております。朝ご飯を食べてこない、または、介護や自分たちの兄弟の面倒を見るために学校に出てこれない、いわゆる今言われているヤングケアラーの存在や、本来でしたら様々なクラブ活動での体験を通じて自己肯定感を高めたいところですが、クラブに所属することがぜいたくになっているというような経済的な状況の方もいらっしゃるということですので、中学校までで支援をおしまいとするのではなく、高校に行ったその先でも、区としてきちんとした責任のある対応が必要だということを高校の先生方のヒアリングで実感したところでございます。今日は様々な話を承りながら、教育委員の先生方からのお立場でも必要な支援についてご提案やご質問を活発にさせていただいて、これからの支援の充実につなげられる会議にしたいと思いません。

また、最後に、あだち未来支援室の室長から、来年度に向けた区の若年者支援の内容についてもご説明をさせていただきたいと思いません。当然のことながら新年度予算の中に、あくまでも案として盛り込む想定というお話でございますが、1つの方向性としては受け止めていただけるのではないかと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

ありがとうございます。

それでは早速議事に入りたいと思いません。

まず、足立工業高等学校と青井高等学校の校長先生にお話をいただければと思いません。

まず鴻野校長先生、よろしくお願いいたします。

○鴻野足立工業高等学校校長

改めまして、足立工業高校の校長の鴻野でございます。よろしくお願いいたします。

本校は、西新井にある足立工業高校でございます。

今年で創立60周年を迎えることができました。どうもありがとうございます。式典は12月に行いますが、コロナの関係がございまして、ご来賓の方々は控えていただくような形で進めさせていただければと思いませんので、よろしくお願いいたします。

今回は若年者支援ということで参加させていただきました。本校もいわゆる中途退学防止のための様々な取組をしてきているところでございますが、少しの成果とまだまだ多くの課題が山積しているところでございます。

ただ、本校の特徴は入学生の9割ぐらいが足立区の子どもたちです。そして、7割ぐらいの子どもたちが卒業後就職をするという進路でございますので、3年後には広い意味で区内にまた戻っていくと、このような特色を持っている学校でございます。したがって、足立区のほうで行っ

ているこういった施策については、本校は都立高校ではございますが、やはり一体となって一緒に勉強させていただければと思っております。

また、後ほどいろいろなお話を頂戴し、また本校に戻って還元していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

ありがとうございました。

続きまして、青井高等学校の加藤校長先生、よろしくお願いたします。

○加藤青井高等学校校長

改めまして、青井高等学校校長の加藤と申します。この4月に着任しております。

本校は、各学年5学級の普通科としては小規模に属する学校です。足立区内の中学の出身者は大体7割から8割ぐらいという状況です。

ここ3年ほど受験者が全員入学するという状態が続いていて、そのため例えば0点、またはそれに近い低得点でも合格するという現状があります。

一方で、特定の教科では高得点という生徒もいるため、教科ごとの学力差が大きいという課題があります。そこで、1学年5学級の募集ですが、それをあえて6クラスに展開して、きめ細かな指導をしています。あとは希望者、特に進学希望、勉強がしたいという生徒については、アドバンスドクラスという形で1クラスないし2クラスに集めているといったようなことで、大学から就職まで多様な進路希望があるため、きめ細かな進路指導体制を構築するといったような特色化に尽力しております。

先ほど区長もおっしゃっていましたが、ヤングケアラーや、経済的な事情で部活に入らずにアルバイトをするという生徒も少なくありません。

中退防止の取組としては、例年20人から30人の中退者がいるのですが、平成31年（令和元

年）度は44人、令和2年度は、今の3年生ですが、これまでに52人というような数が出ていました。

一方、令和3年度、現2年生は昨年度末現在で19人というふうに減っています。そこで、どういった理由が考えられるかということで分析をしたのですが、募集人員がそもそも減ったところ、あとは生活指導を徹底しているとか、スクールカウンセラーやユースソーシャルワーカーを複数配置して手厚い相談体制を構築しているというところで、退学を踏みとどまる生徒が増えたというふうに分析しております。

足立区内ですので、あえて申し上げますが、5、6年前までは荒れている現状というのが確かにありました。授業規律が守られない、問題行動の多発、遅刻、無断欠席の常態化と、そういったところからは脱却しておりまして、現在の本校は落ち着いた環境で学習できる学校であって、次の進路実現に向けて努力できる学校だというふうに自負しております。

もう一つ、退学者の現状ですが、今の現3年生については、52人というふうに申し上げました。これと入学時の成績に相関関係はないかということで分析をしたのですが、分割前期の募集で入学時の成績を上から順に並べると上位50%の生徒は、退学率が1割少々なのです。一方で、下位50%の生徒は4割近くが退学をしています。

一方、推薦選抜の入学者や分割後期募集（3月の募集で、本校より学力レベルの高い学校を不合格となった中学生が多く受験するような状況）での退学者はほとんどいないというような現状も分かりました。

これは特定の1学年だけのデータですが、入学者選抜の成績と退学率に有意な相関関係が見られる以上は、募集段階あるいは入学後のケアなどの対策を講じることで中退防止につながられるのではないかというふうに考えています。

足立区の皆さんとも連携をして、何とか中退に

歯止めをさらにかけていきたいなというふうに考えています。よろしくをお願いします。

ありがとうございました。

○近藤区長

今、「足立区と連携しながら」というようなお話がありました。中学校までの教育に求めることについて、少しお話を伺えたらと思います。

鴻野先生からいかがでしょうか。

○鴻野足立工業高等学校校長

本校の若年者支援に関わるところでの今までの取組や現状を少し説明させていただきます。

私は昨年度本校に着任し、今年で2年目ですが、やはり中途退学というのは当時大きな課題の1つになっていました。

昨年、1年間を通して、最終的に中途退学を減らすということよりも、入学した生徒を3年間いろいろなことを通して育てて、卒業後、社会に送り出すこと、これが本校の大きなまずミッションであろうと考えるようになりました。いわゆる物づくりに興味・関心を持った子どもたちを集めるというのは1つの目標になっていますが、今や物づくりに興味・関心を持っている生徒、子どもたちではなくて、実に様々な課題を併せ持つ子どもたちが入学してきている現状がございます。

したがって、興味・関心のある子だけを育てるということであると、そうではない子は続かなくなってしまう。ですから、考え方を我々が変えなければいけないということで、物づくりを通して、物づくりに興味・関心のない子も含めて、物づくりの楽しさや難しさ、奥深さみたいなものを学んでもらって、社会に送り出そうということでシフトを変えています。

昨年度は、その成果まではいきませんが、結果として、中途退学者を少し減らすことができました。ただ、これはまだ一過性のもので、今年度については現段階で既に転学者、退学者を含めて何

人か出ております。これは短期間で解決できる課題ではないですが、少なくとも学校として、その方向性で進めていくということが大事だということで、今、舵を切っているところでございます。

具体的な取組としては、いわゆる「知・徳・体バランスの取れた子どもたちを育てよう」ということがあります。やはり工業高校の生徒にとっても学力は必要です。

本校では、学力というものをどのように捉えるかということ、就職試験に合格できる学力を身につけることです。具体的にはいわゆる中学校段階で学んだことを基礎にして、高等学校でも基礎・基本をしっかり身につけていこうというような目標でやっています。

ただ、実際のところを申し上げますと、子どもたちの中には、学習習慣と学習環境がなかなか整っていない子が多いです。

例えば、6月に行った都の高校生の生活実態調査のある1項目の結果だけを申し上げますと、本校の生徒で、平日ほとんど勉強しないという子が約54.1%です。土日に至ってはほとんど勉強しない子が64.1%です。そもそも子どもたちが勉強に向き合う姿勢や意欲がしっかりしていないと言われればそれまでで終わりますが、そこは、違う視点があるだろうというふうに考えています。

実際に、宿題や課題を家に持って帰って、家で落ち着いて勉強できる環境があるかどうかということも我々は考えなければいけないだろうというふうに考えています。

その1つの改善策として、やはり学校で勉強するような時間や環境を整備する必要があるだろうということで「スタディーズサポートプログラム」というものを考えました。文教大学の阿野教授と連携を取らせていただいて、大学の学生さんが週2回程度、本校に来校し、放課後の子どもたちの学習サポートを行っていただいています。学習サポートも、日々の宿題が分からない子を基本

の段階とすれば、次の段階が定期考査や資格試験に向けた勉強、最後の段階が大学入試等を視野に入れた勉強、こんな段階に分けて学生さんたちと本校の教員が連携し合っています。まだ成果のほどは上がっていませんが、本校でも英検準2級や3級を取る子が複数出たということと、あとアンケートから浮かび上がってきたのが、「僕はこのように大学生やいろいろな方に1対1で親切に勉強を教えてもらったのは初めてです。僕はとてもうれしいです」という声です。こんな話を聞くと、やはり我々が生徒たちの学習環境を整えてあげるといことは、本校に通う生徒にとってはとても大事なことだろうというような考えで進めているところでございます。

体づくりにつきましては、今本校の生徒の多くはゲームが好きです。ゲームをやる子がほとんどです。この子たちに対しては急に競技レベルの高い部活動とかに入って頑張らせるということではなくて、生涯を通じて豊かなスポーツライフを学んでほしいということで、都から指定を受けて「エンジョイスポーツプロジェクト」というのをやっています。

これは簡単に申しますと、通常学校体育では授業で教わらないようなニュースポーツ、例えば、ヨガ、ストレッチング、ボクササイズ、リズムダンス、そして講義というほどでもありませんが、栄養学、コーディネーショントレーニング等々を行って、子どもたちが自分の体を自分でセルフプロモーションし、ただ自分が運動するだけではなくて、いろいろな形でスポーツに関われるような基礎的・基本的な力をつけてもらおうということでやっています。

最初は数名の子どもたちしか集まらなかったのですが、いわゆる口コミで広がって、今は放課後10名から15名ぐらいの生徒が参加しています。これはあくまでもコンセプトがエンジョイスポーツであり、先生たちも一緒に出て楽しくやるということがポイントですので、このような取

組を通して放課後活動の充実化を図っています。

徳育につきましては、これは昔から本校は区のほうと連携してやっていたことがありまして、それは防災教育です。

昨年度から都の防災士養成講習という事業に本校も積極的に参加させていただき、昨年は11名、今年は22名の生徒が、この防災士養成講習に出て防災士の資格を取っています。

この子たちは本校で行っている校内の避難訓練をはじめ、東京都で行っている宿泊防災訓練、これは今コロナの関係で宿泊ができなくなりましたが、そして足立区の広域避難所運営会議、先日は東京都水道局と連携した給水訓練、このような事業に参加するというよりは、一緒に運営面で参加するという意識を持ってもらって、足立区工業防災チームとして、みんなでユニホームを着て一緒に訓練に参加する、このようなことを行いました。

コンセプトは本校在学中に防災士の資格を取り知識や技術を学んだ子が将来足立区に帰ったときに、きっと足立区の様々な地域の自治会の防災訓練等々に若手のリーダーとして活躍してもらえるだろうということや、地域の防災を守る若手のリーダーになってほしいということを考えて、この事業の拡大を図っています。

来年度は、都との相談にもなりますが、さらに防災士養成講習を受ける生徒を増やして、多くの生徒がこの資格を取って、卒業後地域の防災活動に役立ててもらえればと思います、取組を進めています。

まだこのことが中退防止に直接結びつくような数値的な成果も上がっておりませんが、やはりこのような方向で1人でも多くの生徒たちを育てて卒業し、将来は地域や都に還元していきたいと考えて取り組んでおります。

以上でございます。

○近藤区長

ありがとうございます。中退の主な原因というのはどのようなものになっていますでしょうか。

○鴻野足立工業高等学校校長

なかなか「中退の原因はこれです」というふうに明確に申し上げられないところがあるかと思えます。

1つは、中学から高校に入学する段階、接続の段階で、中学側で言うと一人一人の生徒に応じた個別の進路指導というのがあるかと思えますが、必ずしも明確な希望を持って本校に入学してきている生徒だけではないというところもあるかと思えます。ただし、これは中学校の進路指導がどうなのだろうかという視点だけではなくて、いろいろなケースがあるかと思えます。

例えばで申し上げますと、子どもは定時制に行きたかったけれども、親が「定時制は駄目だから、全日制に行きなさい」と言って本校に来た。しかし「やはり自分は、定時制に行きたかった。」ということで、この子は結果として夏に定時制に転学しています。

それから、これは本校側の課題ではありますが、入試倍率につかない厳しい状況が数年続いておりますので、結果として入学できる状況です。そういったしますと、やはり中学校側も生徒側も、行きたいところという進路選択よりも、行けるところという観点での進路選択をせざるを得ないような子どももいるのではないかという気がしています。

あとは、できるだけ学校説明会等々を通して、工業高校というものをPRしてきているつもりですが、やはり我々の募集広報活動がまだ不足しているという観点から、なかなか中学校や中学校の生徒、保護者に工業高校のPRがしきれていないことで、結果として「ミスマッチ」というようなことが起こっているとも考えられます。

○近藤区長

ありがとうございました。

それと、卒業後は7割が就職という話でしたが、正規の雇用に実際に結びついているのでしょうか。その辺りの状況を教えてください。

○鴻野足立工業高等学校校長

現在の3年生の状況を申し上げますと、就職希望者につきましては、8割から8割5分ぐらいのほとんどがハローワーク、いわゆる求人を通した就職活動を行って内定をいただいています。

状況を申しますと、東京商工会議所等との連携で、最近の区内をはじめ都内の事業所の状況としては、中小企業を中心に約6割の事業所が人手不足になっています。このことは、今年度の求人総数が2,000件を超えていますので、我々も肌で感じているところでございます。こういった追い風もありまして、結果として本校の生徒が就職しやすくなっているという環境はありますが、できるだけ進路指導部を通して、きちんとした就職をさせようという進路指導をしています。

ただし、数名の生徒は未決定、または、ハローワークの求人を通さない、いわゆる縁故というのでしょうか、先輩の働いているところや、知り合いのところ働きたいと言っている生徒もいますので、引き続き進路指導を重ねて、より適切な形での進路が実現するようというふうに考えております。

○近藤区長

ありがとうございました。

それでは加藤先生にもう少しお話を伺ってから、教育委員の先生方から個別にご質問を受けたいと思います。

お願いいたします。

○加藤青井高等学校校長

ありがとうございます。

本校も重なるような話も多いのですが、生徒の

力に合わせて授業を行っているというような中で、中学のときにはあまり勉強しなかったけれども、心を入れ替えて頑張ろうという生徒は少なからずいます。

特にアドバンスドクラスを希望するような生徒の中にはそういう生徒が複数いて、例えば1学期の成績の一覧を見ても、オール5あるいはほぼそれに近い生徒も実際にはいます。繰り返しますが、もちろん進学校のようなレベルで授業をしているわけではないです。それぞれの学期年度当初に生徒の実力を見ながら、これぐらいのレベルで授業を進めていこうという中での成績なので、そういったところは当然考慮する必要はあるのですが、そういう意欲ある生徒がいる一方で、ない生徒もいるというような現状もあります。

転退学の状況ですが、先ほど申し上げた数字は退学の数字です。そこにいわゆる転学は含まれていません。転学を入れるともう少し増えていくのですが、転学する生徒は、大体は広域通信制に行く生徒が多いです。

退学するという生徒についても、基本的には転学を勧めてはいるのですが、結局は行き先が決まらないまま辞めていくというような現状があります。それはなぜかという、それこそ転退学の理由ということで、傾向を1つに絞れないのですが、人間関係であるとか、それからそもそも意欲がない中で入学して、結局、モチベーションが上がらずに不適應という状態で学校に来なくなり、辞めてしまいます。何とか高校を卒業しようという意思を持っている生徒ばかりではないというような現状がどうしてもあるということは認識しています。

そこで、キーワードになるのが「ミスマッチ」ということになります。鴻野先生もおっしゃっていましたが、業者が出す偏差値を見て「青井高校だったら入れる」という意識で入学してくると、意欲の差でなかなかうまくいかないという生徒がいます。学校説明会に来ず、本校の生活指導の

厳しさであるとか、取り組んでいる内容とかをよく調べないで入学してしまう生徒がいて、そういう生徒が辞めていく場合に、皆さんの成績を並べていくと下位の生徒がどうしても多くなってしまいうように思います。

学校としては、「キャリア教育に力を入れている」というふうに先ほど申し上げましたが、進学実績を上げたいという気持ちはありません。あくまでも生徒の希望をかなえたいという気持ちで進路指導をしています。だからといって「大学に行きたい」と言ったら、「分かった。じゃあ大学ね」というふうに受け入れるのではなくて、その能力や適性を見ながら進路について助言をしていくという、そういう意味でのキャリア教育というふうに考えているのですが、その上で生徒が望む、希望をかなえたいという方向で指導しています。

そこで、例えば、必要な模擬試験であるとか、あるいは検定であるとか、そういったところも受験を勧めるのですが、それで出てくるのが経済的な問題です。

例えば、英検も、ここ1、2年で受験料が倍近くになっているというような状況で、家庭の収入によっては東京都が受験料を負担するという制度はありますが、そうではない生徒も高額な受験料を出すのに抵抗があるというところもあって、何とかケアできないものかというふうに思うことはあります。

まとめると、ミスマッチを防ぐために、まずは情報をこちらから提供していきたいということ、言いにくいのですが、過去のイメージを払拭していただいて、今の青井高校を見た上で受験を決めてほしいというふうに思っています。

全入状態がここ3年ほど続いていると申し上げましたが、もちろん倍率が増えるに越したことはありません。しかし、あくまでも本校で勉強したい、本校に入りたい、偏差値云々ではなくて、本校の特色を見てそこで学びたいという生徒が

ちょうどいけばいいかなと思います。理想論を申し上げますとそういうことにはなりますが、そうした上で入学してきた生徒を指導していきたい、生徒の進路希望をかなえていきたい、そういう思いで日々指導しているところです。

○近藤区長

加藤先生、ありがとうございました。

それでは、これまでのところで教育委員の先生方から何かご質問があればお願いいたします。

近藤先生、どうぞ。

○近藤教育委員

お二方の校長先生、学校の状態を詳しく教えていただきましてありがとうございました。

私はふだん、東京未来大学の教員をやっております。開学の頃、高校訪問等を含めまして、両校にお伺いしております。ですから、どんな感じの高校だったかを思い出しまして、大変懐かしく思いました。

一番苦労なさっている点として、お二方も勉強はどこの高校も一生懸命やっているけれども、高校生の人間的、心理的な問題、そして家族からのサポートに関する部分が難しいとおっしゃっていたと思います。

先生方は生徒の学校での人間関係、その先の進路等を考えるにあたり、健康面や生活面を大事にしていると思います。その際、生徒だけではなく、家庭での課題に対しても対応しなければならないことも多いと思います。その辺りを簡単に結構ですので、お話しいただけたらと思います。

子どもたちの健康、意欲、活動をどのようにサポートするか、家族関係をどのように見て対応していくかという点が、私は一番の根幹だと思うのですが、いかがでしょうか。

○近藤区長

お二方からよろしいでしょうか。

○鴻野足立工業高等学校校長

まず、生徒たちの側面から申し上げますと、いろいろな視点があるかと思いますが、1つは中学校、小学校ぐらいから、いわゆる成育歴とか、発達障がいとかの所見が出ている子どもたちが何名か在籍しております。今まで育ってきた中でそういったものについては、なかなか学校の教員だけでは対応できない部分がございます。専門的な方の手助けとか応援、連携が必要になってきます。そういった生徒たちに対しては、東京都では従来から全校にスクールカウンセラーを配置してございますが、それに加えて、今でいう「学校経営支援センター」という教育委員会のほうでシニアカウンセラーという方も配置しております。この方々との連携で生徒の様々なフォローや面談などを行うということもしています。

また、やはり発達障がいについては詳しく分からないという先生が多いものですから、例えば足立区には足立特別支援学校という学校があり、あと、東京都全都で3名配置している特別支援教育のスーパーバイザーという先生もいますので、そういった方をお願いして、何人かの生徒について継続的に支援会議を開催させていただいています。例えば、最初は情報交換から始まり、次の段階としては、授業の中で、子どもたちの言動を見ていただきます。今、学校ではこんなことで困ったり、こんなことでどうすればいいか、どういう対応をしたらいいかということを支援会議で話すと、スーパーバイザーの先生がいろいろアドバイスをしてくださいます。こういった形で対応していくという支援体制を取っている場合もあります。

あと、今の時代は暴力事件や暴力行為ってほとんどないのですが、SNSを介した悪口や、誹謗中傷とまではいかないにしても、生徒たちの間で友達の悪口を言ったりということも起こっていますので、その辺はできるだけそういったリテラ

シーに対する指導もしており、気がついた段階でなるべく早く対応するようというところでやっております。

それから家庭環境でございますが、これは大変複雑でございます。客観的な数値の概要だけ申し上げておきますと、いわゆる東京都の就学支援金、授業料の援助の制度ですが、これは9割ぐらいのご家庭が申請しております。それから東京都独自の給付金というものがございまして、内容によって5万円と3万円に分かれるのですが、これについても約4割弱のご家庭が申請をし、受給されています。

それからもう一つ、奨学のための給付金という別の制度がございまして、これは約2割強のご家庭で申請をされ、受給をされています。いわゆる経済的な面だけの数字だけではございませぬけれども、そういったご家庭の環境があるということがまず1つあります。

それから、学習面、生活面でいろいろな課題を持っている子どもたちと面談やいろいろな話をしていく中で浮かび上がるのが複雑な家族構成です。お父さんと暮らしているとか、お母さんと暮らしているとか、兄弟がたくさんいるが、下の子どもたちは再婚して一緒になった家庭である等の家族構成の子どもたちがいます。

ある生徒が問題を起こした際に聞き取ったときには、「僕には2歳の弟がいます。お母さんはお仕事で働きに出ているので、2歳の子どもの身の回りの世話、御飯、おむつ、お風呂、着替えを僕がやっています」というような、いわゆるヤングケアラーのような話なども、いろいろなことがきっかけで浮かび上がってきます。

したがって、まだまだ私などは本校の生徒の本当の意味での生活の実態、本当の家庭環境の中までは知り得てないところがございまして、何かあったときに対応していく中で、そういったことが出てくるということがありますので、家庭環境についてはいろいろな課題があると感じてい

ます。

あとは、これも難しいので学校だけでは対応できませんが、外国籍のお父さん、お母さん、日本で生まれた生徒というようなこともある等、非常に家庭に関わる課題は複雑で様々でございます。以上です。

○近藤教育委員

どうもありがとうございました。

私自身も別の区でスクールカウンセリングをやっておりますので、おっしゃることは非常によく分かります。

○近藤区長

加藤先生、何か付け加えることはございますか。

○加藤青井高等学校校長

同じ都立高校ですので、支援体制等は全く一緒で、抱えている家庭の課題等もよく似ているところがあります。そういうところはまた繰り返しませんが、本校はスクールカウンセリングのほかに、先ほど申し上げましたとおり、ユースソーシャルワーカー（YSW）が都から派遣されています。昨年度までは2名体制でしたが、今年度は3名体制に増員されて、スクールカウンセラーとYSWで週に3回、生徒は何らかの相談ができるような体制を整えています。

YSWはスクールカウンセラーとは違って、心理の専門家ではないのですが、生徒に寄り添って日常的な悩みであるとか、家庭の悩みであるとか、それから進路の相談であるとか、時には3年生に対しては教員と連携して就職の面接の練習相手もやってくださる等、様々対応しているというように形でケアをしています。そこでスクールカウンセラーやYSWが対応した案件は当然、学校、学年、担任ともすぐに共有して課題解決・改善に向けて検討を重ねていきます。そういった中で対応したことで、本当はもう辞めようと思っていた

が、退学を踏みとどまったという生徒も実際にはいますので、一定程度の大きな効果は得られているというふうに考えています。

以上です。

○近藤区長

ありがとうございました。

小関先生、かつて中学から送り出された立場として、お話を聞きながらどういうふうにお感じられましたか。

○小関教育委員

お話を伺い、大変だと痛感しました。私自身も胸が苦しくなりました。

○近藤区長

小関委員は、元中学校の校長先生でいらっしゃいました。

○小関教育委員

私は、足立区の中学校3校で校長を務めました。両校とも卒業生が進学しているので、いろいろとお話を伺っている中で、入学させた生徒のことが思い出されました。

先程から話がありますように、かつては300人ほどの足立区の生徒が退学してしまう状況がありました。そのため、中学校においてキャリア教育をしっかりと実施することで、高校入学後の退学者を減らすような取組をしていこうと、中学校校長会の中で話をしたこともあります。

私自身も卒業式の際に、最後に握手をして「絶対に辞めるなよ」と約束をさせた経験があります。

ただ残念ながら、足立工業に入学した生徒について、後で話を聞いてみたところ、「数学0点、内申書についても相当悪い」とのことでした。(当該生徒は)足立工業に入学したくて入学したわけではありません。倍率を踏まえて学校を選び、合格しました。

面接練習時には、「工業ってこんなことをやるから、算数、数学はできないと厳しい」「理科が好きじゃないと厳しい」といった話をして、「こんな作業もあるけど大丈夫?」といった声掛けに対して、本人から「大丈夫です」と返答があったことを記憶しています。

本人が入学後の姿を十分にイメージできていなかったり、先ほど言われていましたように、能力的に厳しいお子さんが入学しているケースもあります。こうした生徒が多くなると高校としては非常に厳しいと思っております。

青井高校についても、普通科となると、「普通科で何をするの?」「何をしたいがために普通科に入学するの?」と聞くと、答えられなかったりしました。よくよく聞いてみると、その子たちは、「ダンスをやりたいから」と言っていました。現在、ダンス部はあるのでしょうか。

○加藤青井高等学校校長

あります。

○小関教育委員

違う子でも、「太鼓がやりたいから」というのが入学目的でした。

「将来何になりたい」「こういう仕事に就きたい」ということは考えておらず、卒業後に専門学校へ行き、やりたいことを身につければ良いとの思いがあったようです。

何しろ「高校生になりたい」「3年間エンジョイしたい」「自分が楽しいことをやりたい」「勉強は後回し」という感じでの中学校卒業、高校入学が多いと感じました。

中学校ではいろんな子がいるため、多少救われている部分もあります。一方、高校では同じような子たちが集まるため、将来的なことを考えさせるのは本当に厳しいと思います。

したがって、中学校側でも、読む力、計算力といった基礎学力が無いと厳しい状態になること

は分かっておりますので、これらをもつことを高めていくことに努めています。授業改善やAIの活用を進めながら頑張っておりますので、継続していきます。

また、キャリア教育についても、中学1年生から「これをやりたいから勉強しなければならない」という自分の思いを持てるように指導しております。

かつては3年生で実施していた高校見学も、現在は2年生で実施しています。1年生のうちから高校を調べ、2年生で高校訪問を実施して、3年生では訪問したうえで様々な話を聞く等、早め早めに取り組んでいます。

受験時、結果的に倍率が低く全入学となる場合があります。下級生が勉強せずに0点でも入学できるという思いになることがないように、「頑張らないと入学できない」「先輩はこのように取り組んでいた」という部分を見せるために、卒業生の話を聞く会などももうけています。

現実には厳しいため、我々として、できることはやっつけていこうと考えております。十分ではない部分もあると思いますが、努力しております。

○近藤区長

ありがとうございます。

早川先生、倉橋先生、それぞれ何かございますか。

○早川教育委員

現場の先生方の大変さを思うと、なかなか言葉が見つかりません。

全入学を逆手にとって、百マス計算などから始めてもいいのではないのでしょうか。

「百マス計算を毎日続ける」「文章を音読する」といった単純なことの継続が大事だと思います。

そのような積み重ねにより、日常生活における計算ができるようになることのほうが大事だと思います。

国家試験に合格している方であっても、短い時

間の中で、さっと文章を読み、的確に次の対応をすることは難しいので、そのような教育も大切だと思います。

また、最近によく不眠に関する話題が出ますが、寝る前ぎりぎりまでゲームをすると眠れなくなるのであれば、寝る1時間前にはゲームをしなければ良いのです。当たり前のことですが、意外と当たり前のことができずに不眠になり、相談に来られる方が多くいます。

当たり前のことが徹底できれば、先ほどの防災活動の件ではないですが、まちの主役になれる可能性もあります。生きる力を身につけられる学校があっても良いのではないかと思います。

○近藤区長

よろしいですか。ありがとうございます。

倉橋先生、いかがでしょうか。

○倉橋教育委員

お話ありがとうございます。

コミュニケーションに課題のある生徒さんが何人かいらっしゃるとのことでしたが、現在、足立区の小学校、中学校にはコミュニケーションの教室が全校に入りました。

学校を訪問すると、大体1～2割、多い学校だと3割ぐらいの子どもたちがコミュニケーションの教室を利用しています。

コミュニケーションに課題のある子どもたちに対し、小学校・中学校では大分手厚くなってきましたが、高校へ入学した途端に普通の子と同じ扱いでは高校の先生方も困るのではないのでしょうか。また、子どもたちも、今まで手厚くしてもらっていたのに突然手を離されてしまっただけは困惑するのではないのでしょうか。

高校だけでは難しいと思うのですが、せっかく小学校、中学校でコミュニケーション能力を少しずつ高めてきた子どもたちが、高校でも同じように学校内でサポートを受けられれば良いと思いまし

た。これは、都に要望すべき内容であるため、区での対応は難しいと思うのですが、考えをお聞きしたいと思います。

また、ヤングケアラーについては、高校どころか、小学校、中学校から増加していると思います。高校生になると、「親だけでなく、下の子の面倒も見なければいけない」「自分の学費を自分で稼がなければいけない」といった子が増えて、学習意欲が落ちてしまいます。

ヤングケアラーは見つけにくいと思うのですが、全校に入っているスクールカウンセラーも活用しながら早急に見つけて、何かしらの対応してもらえると良いと思いました。

以上です。

○近藤区長

ありがとうございました。

時間が来ておりますので、これからの足立区の新たな取組のプランについて、楠山室長のほうからご説明ください。

○楠山あだち未来支援室長

あだち未来支援室の楠山と申します。今後のプランについて、簡単にご説明させていただきます。

先ほど委員の皆様から、コミュニケーションの課題があるとか、学習の環境がないとか、いろいろな課題をいただきました。それを踏まえて、東京都ではやっていますが、それ以外のところを何とか区でできないかということで、「(仮称)あだち若者全力応援プラン」を来年度に向けて考えているところでございます。

まず1つ目の「学ぶ」というところで、2つ支援を考えております。1つ目は高校生の居場所を兼ねた学習支援のところ、高校でもやられていますが、放課後に学校とは別の場所で学習支援を行うものです。中退した方向けに高校卒業認定試験の支援もできると思います。

また、2つ目は「(仮)ミライ塾」ということ

で、先ほど少しお話がありましたが、難関大学を目指していても、なかなか経済的に困難で塾に行けないお子さんについては、中学校で「はばたき塾」というのをやっていますので、それを高校生でもできないかということは今検討しているところです。

「働く(関わる)」というところでは、先ほど鴻野先生からもお話がありましており、就職する方が多い学校については、コミュニケーションができないと就職も難しいのではないかとすることがあります。診断は取っていないが、発達障がい傾向のあるお子さんに対して支援をするところがこれまでなかなかありませんでした。そこで、3番の「個別就労支援プログラム」については、今年度7月に開設した「SODA」という若者の相談窓口の同じ建物の2階のクリニックで、手帳や診断を受けた方向けに、障がい者の自立支援法内で支援をしているのですが、法外でも幾ばくか足立区から支援をさせていただいて、そういうお子さんの就労支援プログラムができないかということを考えております。

また、そもそもコミュニケーションがなかなか取れない、就労までいかないお子さんがいると思います。そういった方向けには、大学生のような割と年齢に近い学生が主体となって運営している居場所が足立区にはございますので、そこに、その高校生を入れて伴走型の支援をしたいと考えています。そこは子どもたちが集まってくる駄菓子屋のようなところですので、小学生のお子さんと一緒に支援し、大学生とも関わり合いながら、自分も支援者になることで少しでも意欲の改善や、感じられるものがあるのではないかとということで、そのような支援も考えております。

最後に「暮らす」というところで、これは給付金になりますが、「(仮)高校生応援支援金」というものを考えています。先ほど先生からもお話がありましており、非課税世帯であれば高校の就学支援金、いわゆる高校生版の就学援助は13

万円ぐらい出ているのですが、生活保護や非課税世帯以外のお子さんの中には、実はクラブ活動における費用であるとか、体験活動とか食費も含めてお困りの方がいるのではないかとということで、課税世帯の収入の低い方を対象とした支援金を支給し、いわゆる空白になっている部分を埋める形で何らかの支援ができないか、来年度少し検討したいと考えております。

このようにして若年者支援を来年度足立区としてもかなり手厚くやっていきたいというふうに考えております。

○近藤区長

最後の高校生の応援資金につきましては、先ほど加藤校長先生がおっしゃられた検定試験についても対象になるのではないかと考えています。また、現場ではこういうところで今一番困っていて先に進めないというようなことがあれば、具体的に項目に入れ込むことも可能です。この場でなくても結構ですから、ぜひご要望いただければと考えております。

教育長のほうから何かありますか。

○大山教育長

両校長先生、本日はありがとうございます。

私としては、中高接続会議も含めて区内の校長先生方と、顔の見える関係で話をさせていただけるようになり、非常にありがたいと思っております。

また、本日は中退者が少なくなった原因、学校の取組を詳細にお話いただき非常に参考になりました。改めて、小中学校で基礎力を固め、なおかつ目的意識を持って高校に入学することが大事だということを感じました。

現在検討を進めている育英資金ですが、今までの貸付型は応募される方が少ないという状況を踏まえ、検討委員会を立ち上げて給付型を検討しております。

これは、先ほども話がありましたが、低所得の方だけではなく、もう少し所得のある方、進学希望があるものの家庭の経済事情で大学に行けない方も対象になります。

これからもいろいろな情報をいただきながら、教育委員会としても若年者支援に取り組んでいきたいと考えております。

以上です。

○近藤区長

鴻野先生、加藤先生、それぞれ学校の中身をきちんと知って志望してほしいというお話がありました。

高校のほうでも、情報発信や様々な方法を通じて、理解を深めてもらう努力をさせていただいていると思いますが、もしかすると、なかなか保護者や中学校現場に届いていないかもしれません。小関先生、今と時代が違うかもしれませんが、情報の受け手と発信のやり取りというのは十分だというふうにお考えですか。

それでも「0点でも入れるんだ」というところが先に立ってしまい、学校の中身や、生活指導をしっかりとやられているというような学校の本質を保護者や本人がなかなか理解できないままにまず走ってしまっているか等、そのあたりのところはいかがでしょうか。

○小関教育委員

現在は、様々な手段で情報を得ることができません。実際に高校を訪問したり、インターネットで調べてみたり、先輩・卒業生から様子を聞くなど、親御さんを通してではなく、本人たちが勉強するという方向で動いているところです。

親に頼るばかりではなく、子どもたちにしっかりと教育をして、子どもが理解したうえで選択できるよう、中学校で取り組んでいく必要があると思います。

私も（校長時代に）青井高校は「生活指導がす

ごく厳しくなっているよ」と面接練習で話した記憶があります。各高校の正しい情報を伝えようと進路選択をさせていますが、十分ではない部分もあると思います。

中学校としては、できるだけ早いうちから子どもたちに新しい情報を与えて、「高校進学」「就職」等々で、正しく選択できるようにと思っています。

○近藤区長

ありがとうございます。

先生方から「ミスマッチ」というお声が出てきました。どうしても保護者の方は、定時制より昼間、昼間であれば商業・工業よりも普通科みたいな傾向があり、結局入学したものの、おっしゃったような状況になるということもあるというように聞いております。そのため、保護者の方にもお子さんの立場に立った将来設計みたいなものをきちんと理解いただきたいと思います。家庭状況の厳しさから、お子さんにそこまで気持ちを割ける経済的、精神的な余裕があるご家庭ばかりでないのが辛いところでもあります。

最後に、残り時間が僅かですので、お一言ずつになりますが、これからの期待や、こういうことをぜひ区教育委員会に頼みたいというようなことがあれば、お一人ずついかがでしょうか。

○鴻野足立工業高等学校校長

ありがとうございます。

これからの抱負や期待というほどではございませんが、やはり今時代が大きく変わっておりまして、本校を取り巻く状況で言うと、これはいつも学校説明会において「今、進むならば工業がいいですよ」という話をよく保護者の方と中学生にしています。

具体的に申しますと、SDGsという観点で「工業高校で学んだことで就職する会社は、AIがこれからどんどん進んでいってもなくなりま

せん」というような話しています。持続可能な企業というか、どんなに進んでもなくならないような分野の仕事があります。そういった意味で、「就職」という点では、圧倒的なアドバンテージがあります」ということを話しています。

また、勉強が苦手とか、友達関係が苦手とか、いろいろ課題があっても、誰でもいろいろな長所・短所はございますので、「うちは好きなことを得意にして、得意なことを長所にしていきますから」という話をしています。

冒頭申しましたが、少し前までは「物づくりに興味・関心のある子を受け入れます」と言っていた言葉から、「物づくりを通していろいろな子どもたちを育てます」というふうに変えていこうと思っております。

足立区のこの全体計画は大変素晴らしいと思います。私もこういうプランやプログラムには一緒に協力させていただきたいと思っております。

あとは、このプランについて、いかに狙いを定めている生徒たち、高校を辞めた一般の人たち、中退した人たちにどう伝え、どう分かってもらって足を運んでもらうかというところの仕組みとか、ツールとか、そういうところが結構大事になってくるのではないかと感じております。

いずれにしても一緒に私も勉強させていただきたいと思っております。

○近藤区長

ありがとうございます。

中退後のプライバシーの問題があるので、本当に必要な方をここにつなげていくというのは、また一工夫、二工夫必要だと思いますので、ご相談に乗ってください。よろしく願いいたします。

加藤先生、いかがでしょうか。

○加藤青井高等学校校長

ありがとうございます。

まず先ほどご説明のあった全力応援プランですが、本当に居場所支援というのはありがたいというふうに思います。

「コミュニケーションの力を」というお話もありましたが、ただ居場所を提供するだけではなく、そこで誰かが相手をしてくれるというような環境を整えると、例えば本校の生徒が行っても何をしたいかわからなかったり、行くことに不安があったりすると思いますので、それがいいような環境が整っているとこちらからもPRがしやすいです。

あと、過去のイメージを払拭したいという話を何度もさせていただきましたが、「高校生になりたいから青井高校に入学した」というような生徒がいたと、小関教育委員からもお話がありました。

実際にイメージという意味では、今年度の生徒会の生徒から聞いたのですが、その生徒の言葉をそのまま使うと「ヤンキーだらけの学校だと思っていた。でも学力的に青井高校かと思って受験した。でも、入ってみたら全然違って驚いた」というふうに言っていました。そういうイメージがなかなか払拭できていない中で受験するという生徒が実際にいるということを実感したところです。区立の中学校をできれば1校1校回ってお話しをさせていただきたいとも思っていますが、区を通じて、進路指導の状況であるとか、進路指導の先生方がどういった観点で青井高校を勧めているとか、そういったところの現状を教えてくださいただけると、こちらとしても、それをどう募集対策に活用していこうかということの検討になると思います。都立高校ではありますが、区の皆さんとはさらなる連携をさせていただければというふうに考える次第です。

よろしく申し上げます。

○近藤区長

ありがとうございました。

今日は担当の部長たちも来ておりますので、今

お話の出たご要望については、具体的な形にできるように取りまとめてまいります。

また、「ヤンキーだらけの学校だと思っていたが、来てみたら全然違って驚いた」というお話は、「足立区はヤンキーばかりだと思っていたが、暮らしてみたら結構暮らしやすくよかった」ということと置き換えられるような気がしました。何とかして昔ながらのイメージを払拭しようと頑張っているのは青井高校ばかりではなく私どもも一緒ですから、ぜひ、ともに頑張っていきたいと思います。

一つ一つ学校を回られるのも大変だと思いますから、例えば機会を捉えて校長会でお話をいただく形で考えていきたいと思います。

○大山教育長

はい。機会をつくって。

○近藤区長

ぜひぜひ。

「こうやってうちのほうは指導しています」という実態を持つてのお話でしたから、きちんと意見交換ができるようにして、実を上げていただくと今日の会議の成果も上がるのではないのでしょうか。

○大山教育長

分かりました。ありがとうございます。

○近藤区長

よろしいでしょうか。

大変お忙しい中、ありがとうございます。今日で終わりということではなく、今日お話しいただいたことを生かして一歩、二歩、前進してまいりますので、今後とも一緒に頑張っていけるようにご指導をお願いいたします。

ありがとうございました。

○伊東政策経営課長

以上で本日の議事を終了させていただきます。

それでは、令和4年度総合教育会議を閉会といたします。

ありがとうございました。